

主日礼拝説教「その手を開いてみれば」 予稿

日本基督教団石神井教会 2026年9月13日

【旧約聖書日課】申命記 15章1～11節

¹七年目ごとに負債を免除しなさい。²負債免除のしかたは次のとおりである。だれでも隣人に貸した者は皆、負債を免除しなければならない。同胞である隣人から取り立ててはならない。主が負債の免除の布告をされたからである。³外国人からは取り立ててもよいが、同胞である場合は負債を免除しなければならない。

⁴あなたの神、主は、あなたに嗣業として与える土地において、必ずあなたを祝福されるから、貧しい者はいなくなるが、⁵そのために、あなたはあなたの神、主の御声に必ず聞き従い、今日あなたに命じるこの戒めをすべて忠実に守りなさい。⁶あなたに告げたとおり、あなたの神、主はあなたを祝福されるから、多くの国民に貸すようになるが、借りることはないであろう。多くの国民を支配するようになるが、支配されることはないであろう。

⁷あなたの神、主が与えられる土地で、どこかの町に貧しい同胞が一人でもいるならば、その貧しい同胞に対して心をかたくなにせず、手を閉ざすことなく、⁸彼に手を大きく開いて、必要とするものを十分に貸し与えなさい。⁹「七年目の負債免除の年が近づいた」と、よこしまな考えを持って、貧しい同胞を見捨て、物を断ることのないように注意しなさい。その同胞があなたを主に訴えるならば、あなたは罪に問われよう。¹⁰彼に必ず与えなさい。また与えるとき、心に未練があってはならない。このことのために、あなたの神、主はあなたの手の働きすべてを祝福してくださる。¹¹この国から貧しい者がいなくなることはないであろう。それゆえ、わたしはあなたに命じる。この国に住む同胞のうち、生活に苦しむ貧しい者に手を大きく開きなさい。

【使徒書日課】コリントの信徒への手紙二 9章6～15節

⁶つまり、こういうことです。惜しんでわずかしか種を蒔かない者は、刈り入れもわずかで、惜しまず豊かに蒔く人は、刈り入れも豊かなのです。⁷各自、不承不承ではなく、強制されてでもなく、こうしようと心に決めたとおりにしなさい。喜んで与える人を神は愛してくださるからです。⁸神は、あなたがたがいつもすべての点ですべてのものに十分で、あらゆる善い業に満ちあふれるように、あらゆる恵みをあなたがたに満ちあふれさせることがおできになります。⁹「彼は惜しみなく分け与え、貧しい人に施した。彼の慈しみは永遠に続く」と書いてあるとおりです。¹⁰種を蒔く人に種を与え、パンを糧としてお与えになる方は、あなたがたに種を与えて、それを増やし、あなたがたの慈しみが結ぶ実を成長させてくださいます。¹¹あなたがたはすべてのことに富む者とされて惜しまず施すようになり、その施しは、わたしたちを通じて神に対する感謝の念を引き出します。¹²なぜなら、この奉仕の働きは、聖なる者たちの不足しているものを補うばかりでなく、神に対する多くの感謝を通してますます盛んになるからです。¹³この奉仕の業が実際に行われた結果として、彼らは、あなたがたがキリストの福音に従順に公言していること、また、自分たちや他のすべての人々に惜しまず施しを分けてくれることで、神をほめたたえます。¹⁴更に、彼らはあなたがたに与えられた神のこの上なくすばらしい恵みを見て、あなたがたを慕い、あなたがたのために祈るのです。¹⁵言葉では言い尽くせない贈り物について神に感謝します。

【福音書日課】 マルコによる福音書 14章1～9節

¹さて、逾越祭と除酵祭の二日前になった。祭司長たちや律法学者たちは、なんとか計略を用いてイエスを捕らえて殺そうと考えていた。²彼らは、「民衆が騒ぎだすといけな
いから、祭りの間はやめておこう」と言っていた。

³イエスがベタニアで重い皮膚病の人シモンの家にて、食事の席に着いておられたとき、一人の女が、純粋で非常に高価なナルドの香油の入った石膏の壺を持って来て、それを壊し、香油をイエスの頭に注ぎかけた。⁴そこにいた人の何人かが、憤慨して互いに言った。「なぜ、こんなに香油を無駄遣いしたのか。⁵この香油は三百デナリオン以上に売って、貧しい人々に施すことができたのに。」そして、彼女を厳しくとがめた。⁶イエスは言われた。「するままにさせておきなさい。なぜ、この人を困らせるのか。わたしに良いことをしてくれたのだ。⁷貧しい人々はいつもあなたがたと一緒にいるから、したいときに良いことをしてやれる。しかし、わたしはいつも一緒にいるわけではない。⁸この人はできるかぎりのことをした。つまり、前もってわたしの体に香油を注ぎ、埋葬の準備をしてくれた。⁹はっきり言うておく。世界中どこでも、福音が宣べ伝えられる所では、この人のしたことも記念として語り伝えられるだろう。」

ナルドの香油【こども説教のために】

ある日のこと、食事の席に着いていらした主イエスに近づいてきた女の人がいました。その手には、石膏の壺が大事そうに握られていました。どうやらその壺には香油が入っているようです。封がされたままの香油の壺です。きっと大金を支払って手に入れたものなのでしょう。売れば高値で買ってくれる人があるに違いありません。困ったときのために、あるいは、ここぞと言うときのために、取っておいたのかもしれません。その香油の壺を持って女の人が主イエスに近づいてきました。

周りの人たちは、彼女がその香油の壺を主イエスに差し出すものと思ったかもしれません。主イエスはこれまで、弟子たちと旅を続けて来られて、多くの貧しい人と食事を共になさることもありました。五千人の人に食事を与えるようにとおっしゃられて、弟子たちが困ったこともありました。五千人の人の食事を用意するには、当時の貨幣で 200 デナリオンは必要でした。主イエスに近づいてきた女の人が手に持つ香油の壺はどれほどの価値があるだろうかと、周りの人たちは想像したかもしれません。それが「ナルドの香油」だったならば 300 デナリオンで売れる、と。

ところが、その女の人は、主イエスの近くまで来ると、石膏の壺を割ってしまいました。「ナルドの香油」の香りでした。壺の中身は、あっという間に流れ出してしまいます。するとその人は、その香油を手で掬って、主イエスの頭に注ぎかけたのです。

それを見て、憤慨した者たちがいました。けれども、主イエスは言われたのです、「この人は、わたしに良いことをしてくれたのだ」と。

あなたの手の働き

主日礼拝ごとに聖壇に献花をささげていただいています。献花を申し出てくださる方と、準備の奉仕をしてくださる方があって、続けられています。以前、これを続けるかどうかという議論をしたことがありました。聖壇の献花は、礼拝に不可欠のものではないかもしれませんが。何か緑のものを置きたいのならば観葉植物でよいのではないかと、という意見もあります。一日の主日礼拝だけのために献花をささげるくらいならば、その分を献金したほうが役に立つ、とお考えの方もありません。実際、献花がささげられない日には、観葉植物を置くこともあります。献花をされない分、献金をしてくださっている方もあるのでしょうか。けれども、献花を大切に考えてくださっている方々があり、続けられてきました。たとえ無駄遣いと思われようとも、観葉植物では献花の替わりにならないのです。

同じようにキリストに従う信仰を与えられ、同じ教会に連なり、主の日ごとに同じ礼拝にあずかっている、わたしたちは、それぞれに何が**良いこと**なのか、違った考えを持っているようです。

もちろん、すべてが違うわけではありません。わたしたちは皆、主イエスがそうなさったように、**貧しい人々のために良いこと**をしたいと考えます。神のため、神のご計画のために、つまり世界のために、**良いこと**をしたいと考えます。教会として共通に**良いこと**だとされてきたこと、そう考えられることを、わたしたちは共に取り組むこともいたします。今も、わたしたちの教会では、6月に発災したベネズエラ大地震の救援募金を呼びかけています。ささやかなことですが、教会は、わたしたち皆の**手の働きが良いこと**に向かうように機会を設け、呼びかける役割を果たそうとしているのです。

それでも、わたしたちは、皆が同じように一つの**良いこと**に足並みを揃えられるとは限りません。わたしたちは、それぞれ違うのです。ですから、一人ひとりが主体的に自分で判断してどうするかを決めるべきですし、互いに他の者の判断についてとやかく言うべきではないでしょう。

三百デナリオンで売ることもできたナルドの香油の壺を割り、主イエスに注ぎかけるということをした女を、非難した者たちがいました。けれども、主イエスは言われたのです、「**するままにさせておきなさい。なぜ、この人を困らせるのか**」と。「**この人はできるかぎりのことをした**」と。

使徒パウロも、聖なる者たちの貧しさを助けるための募金を呼びかけたとき、それを無理強いしようとはせず、こう記しました、「**各自、不承不承ではなく、強制されてでもなく、こうしようと心に決めた通りにしなさい**」と。そうしてこそ、**神は…あらゆる善い業に満ちあふれるようにしてくださる**、と信じていたのです。

手を大きく開いて

献花や募金などお金のかかる話になると、「自分には、そのような余裕はない」とおっしゃる方があるかもしれません。むしろ、「自分はどちらかと言えば貧しい人と呼ばれるような生活をしている」とお考えの方も、あるかもしれません。教会で**良いこと**が勧められ、**善い業**に励むようにと教えられると、どこか在所が無い思いにさせられる、という方もあるかもしれません。

もちろん、教会は、経済的に裕福な者もいれば、そうでない者もいるところです。教会が経済的に裕福な者ばかりで、皆が惜しみなく寄付や募金、そして献金できる者ばかりだとしたら、おかしいことです。教会は、すべての人に開かれているところなのですから、世の中と同じくらい多様な人々がいてこそ、本当に教会らしいと言えるのでしょう。

だからこそ、主イエスは、三百デナリオン分もの高価な香油を惜しげもなく一度に注いでしまう女のことだけを見ていらしたのではありませんでした。この出来事の前日、神殿の境内に座り込んで主イエスをご覧になられていたのは、賽銭箱にわずかにレプトン銅貨二枚だけの献金をしようとやってきた一人のやもめの姿でした。主イエスは、その姿をご覧になられて、「**この人は、乏しい中から自分の持っている物をすべて、生活費を全部入れた**」(12:44)とおっしゃられたのでした。彼女も、香油を注いだ女と同じように、「**できるかぎりのことをした**」のです。

賽銭箱の前に進み出た貧しいやもめの手の中には、銅貨二枚が握られていました。食事の席で主イエスに近づいた女の手の中には、香油の壺が握られていました。それは、彼女らにとって大切な、できれば手放したくないものだったはずです。けれども、その手を開きました。閉じたままにせず、手を大きく開いて、その手の中にあつたものを明け渡しました。

その手には、何も残りませんでした。大きく開かれた手には、何も残されませんでした。

けれども、その手は大きく開かれています。そこには、空の手が開かれています。大きく開かれています。その手の中に握られていた物は、今は無いからです。ただ、その代わりに、何物でも受けとめられる手が大きく開かれているのです。大きく開かれた手は、そこにある恵みを豊かに受け取ることのできる手となったのです。

この手を開いて見なければ、わかりません。この手で受け取ることのできる大きな恵みを、豊かな実りを、手を開かなければ、知ることはできません。手を開いて、そこに握りしめられていたものを、言葉を、思いを、行いを主に注ぎ出してしまうのです。死に行かれた主にお委ねするのです。ただ、手を大きく開いて、神のお与えくださる恵みを受け取らせていただくのです。